

批判主義に於ける自由の問題 (下ノ二)

中 林 嘉 太 郎

十六

批判主義に於ける社會概念は、人類歴史の嚮導理念としての社會の概念を吾人に提供するものなる故に、夫は固より何等現實的なる社會概念ではなく、反つて唯理想的なる社會概念である。現實社會の原型たるべき理想社會の概念、夫が即ち批判主義に於ける社會概念に外ならない。是の如き理想社會は抑、如何なる個人から成立するのであるか。單なる個人の集合のみにては固より是の如き理想社會は成立しない。理想社會を成立せしめる個人は、單なる個人ではなくて、反つて唯自己に於て人類の道徳的使命を自覺せる自覺的個人でなければならぬ。自己に於て特殊の自己を自覺せる個人ではなくて、反つて唯自己に於て、特殊の自己を包攝して更により高次の立場に立つ普遍的自己を自覺せる個人でなければならぬ。是の如き意味に於ての自覺的個人のみが、始めて人類の理想社會を構成し得るのである。個人

に於て自覺さるべき人類の道德的使命とは何であつたか。夫は云ふ迄も無く、吾人が曩に「入」に於て「純粹實踐理性の根本法則」として提出せるものに外ならない。然し乍ら單に「汝の意志の格率が凡ゆる時に同時に普遍的立法の原理として妥當しうる様に行爲せよ」と命ずるのみにては、此の純粹實踐理性の根本法則は、吾人に對して何等具體的表象を與へることが出來ない。吾人が此の根本法則を吾人の實踐生活に適用せんが爲には、吾人は此の根本法則を單に抽象的に思惟するのみならず、更に之を具體的に表象しなければならぬのである。而も純粹實踐理性の根本法則が、實踐的感覺界を超越せる實踐的容知界に於て始めて思惟可能なる以上、吾人は此の根本法則を何等感性的直觀によつて表象することは出來ないであらう。唯然し乍ら感性的直觀を悟性的思惟によつて綜合統一する所の自然律が、其の形式的普遍性に係はる限り、吾人は之を道德律の範型として採定することが出来る。カントが其の「實踐理性批判」に於て「純粹實踐的判斷力の範型論」(P. V, 67-72)として展開せる所のものは正に之に外ならない。即ち個人の自覺の内容たるべき道德律は、其の形式の上より考察されたる時は、自然律の如くに普遍妥當的でなければならぬのである。斯くして純粹實踐理性の根本法則を吾人の直觀に接近せしめんがために、夫

は次の如く換言され得るのである。「汝の行爲の格率^レが汝の意志によつて普遍的自然律たる可きかの様に行爲せよ」(三、上二)。嚴密自然科學(物理學)に於ける法則が、凡ゆる自然現象に對して普遍的に妥當するが如く、純粹道德哲學(倫理學)に於ける法則は、凡ゆる意志現象に對して普遍的に妥當しなければならぬのである。是の如き普遍的妥當性を有つ道德的意識を獲得することが即ち人類の道德的自覺に外ならない。是の如き意味に於ての自覺の立場に立つ個人のみが、始めて人類の理想社會を構成し得るのである。

然し乍ら個人の自覺内容を是の如き普遍妥當なる道德的意識として規定するとしても、夫は單に吾人の道德的意識の形式的規定であつて、其の實質的規定ではない。然る限り夫は吾人の實踐生活に於て何等現實的意義を發揮し得ないであらう。夫が吾人の實踐生活に對して現實的意義を發揮し得んが爲には、夫は更に實質の上より規定されなければならぬのである。然らば吾人の道德的意識を實質の上より規定する時、夫は如何なる形態を探る可きであるか。固より批判主義は通常批評せらるゝが如く、形式主義であつて、本來の意味に於ての實質的なるものを採り容るゝ餘地なきことは論を俟たざる所である。然し乍ら吾人は尙實質的なるものに就

て、其の經驗的なるものと先天的なるものとを分つことが出來るとするならば、形式主義の立場に終始し乍ら、而も尙吾人は或る種の實質的なるものを採り容れることが出來るであらう。其の存在上單に相對價値を有するに過ぎざる實質は固より經驗的實質であつて何等の先天性をも有し得ない。然し乍ら其の存在上絕對價値を有する實質は、明らかに先天的實質として認識されなければならない所のものである。吾人は是の如き先天的實質として、個人に於ける審知的なるもの、即ち人格に於ける人格性 (Personalität der Person) を考へることが出來る。夫は即ち吾人が嘗つて「六」に於て、吾人の人格の根柢としての物自體概念として定立せる所のものに外ならない。是の如き意味に於ての人格性は當然先天的實質的なるものとして承認されなければならない所のものであらう。此の人格性を原理として吾人の道德的意識を規定する時、夫は始めて何等かの實質性を有ち來るのである。カントが「純粹實踐理性の根本法則」より誘導されたる第一の法則に對して、第二の法則を定立してゐるのは正にこれによるものでなければならぬ。「汝が汝の人格並びに他の凡ゆる者の人格に於ける人間性を、凡ゆる時に同時に目的として使用し、決して單に手段として使用せざる様に行爲せよ」(III, 429)。社會に於ける事物は凡て道具として何等か

の存在價值を有つ。然し乍ら如何に其等の存在價值が大であらうとも、夫は畢竟するに單なる手段的使用價值に過ぎない。従つて夫等のものは凡ゆる時に單に人間生活に於ける手段として使用されるに過ぎないであらう。唯人間のみは、其の中に人間性を宿すを以ての故に、其の存在價值は單に是の如き手段的使用價值たるに止まらず、夫自身一個の獨立せる目的的使用價值を有するのである。單に感覺的なるものの存在價值は相對價值たるに止まる。唯審知的なるものの存在價值のみ、始めて絕對價值たり得る。是の如き審知者としての人格の衷なる人間性は、人類の協同生活に於て、決して單に手段としてのみではなく、恒に同時に目的自體として取扱はれなければならぬであらう。社會に於ける如何なる卑賤なるものも、夫が均しく神の子である限り、彼は尙社會によつて、決して單に手段的存在者として、ははなく、恒に同時に目的的存在者として取扱はれなければならないのである。固より人間が感覺的審知的存在者であり、而して此の人間の感覺的存在を契機として、手段機構(Mittelmechanismus)としての社會機構(Sozialmechanismus)が成立し、之を地盤としてのみ人間生活が可能である以上、吾人は人間の存在に就て、其の手段的使用價值の方面を全然閑却することは出来ない。たゞ徹頭徹尾人間を單に手段としてのみ使用して、

恒に同時に之を目的自體として使用せざることを却けんとするのである。恒に同時に目的自體として使用しさへすれば、手段として使用するは固より不可なきのみならず、寧ろ夫のみが有限的存在者としての人間に許されたる唯一の社會關係であらう。(人間の手段的自己目的的存在性格に就ては、和辻教授「カントに於ける人格と人間性」哲學研究第百八十一號二——一〇頁參照。是の如き意味に於ての社會的自覺の立場に立つ個人のみが、始めて人類の理想社會を構成し得るのである。

吾人は上に於て、實踐の形式的原理に對して其の實質的原理を樹立した。今や此の二つの原理は茲に綜合されて更に新に第三の實踐の原理が發生するのである。第一の實踐的原理に従へば、吾人の實踐の根據は法則の普遍性であり、第二の實踐的原理に従へば、吾人の實踐の根據は人格の目的性である。此の兩原理の結合によつて其處に形成されるものは、目的的存在者としての各理性的存在者の普遍的に立法する意志でなければならぬ。斯くして茲に第三の實踐的原理として、普遍立法的意志としての各理性的存在者の意志の理念 (Idea) なる方式が發生するのである。道德的存在者としての各理性的存在者に對して、其の實踐の法則を賦與する所のものは、何等自己の外なる神てふ如きものではなくて、反つて唯理性的存在者自身

となるのである。自覺的存在者としての各理性的存在者は、自己が自己に對して普遍的法則を賦與し、其の自己によつて賦與された法則に従つて自己を限定しなければならぬのである。批判主義の基礎概念たる自律の概念は、茲に於て其の最も深刻なる一面を表はしてゐるとも云はれ得るであらう。是の如き理念としての普遍的立法の意志を自己に於て自覺する個人が、始めて人類の理想社會を構成し得るのである。自覺的存在者は固より一定の普遍的法則の表象に従つて行爲する。然し乍ら其の行爲の原理たるべき法則は、素々これ自己自身によつて賦與されたものであり、而も唯其の故に之に服従するのである。茲に始めて他律の立場に墮せざる服従、また驕慢の意識を伴はざる立法が爲されるのである。自己が審知的存在者である限り、自己に對し、従つて又他者に對して行爲の法則を賦與し、而も自己が感覺的存在者である限り、此の審知的自己によつて賦與された行爲の法則の前には絶対に服従すること、此の高貴なる誇りの意識と、此の敬虔なる謙りの意識とを併せ有する自覺的個人のみ、始めて人類の理想社會を構成し得るのである。

十七

吾人は前節に於て、人類の理想社會を構成し得るものは、人類の道德的使命を自己

に於て自覺せる個人、換言すれば純粹意志の根本法則を、其の形式の側に就て、また其の實質の側に就て、更には又其の形式、實質の側に就て自覺せる個人なることを論じた。是の如き自覺的存在者としての個人、即ち其の意志の格率を通じて普遍的法則者を賦與し得るが如き個人は、最早單に孤立的存在者として存在する存在ではなくて、反つて自己の衷なる普遍立法的本性の故に、其の自己に於ける普遍的なるものを結合原理として、茲に一個の社會聯關を構成するのである。夫は何等人工的 (Künstlich) なる社會的結合ではなくて、反つて寧ろ極めて自然的 (natürlich) なる社會的結合でなければならぬ。自覺せる個人に於て自覺されてゐる「自」(Selbst) なるものは、何等特殊なる自己でもなく、また特殊なる他者でもない。夫は單なる特殊者としての自他を包攝して、而も之を超越し、更により高次の立場に於て之を統一する所の、普遍的なる「自」である。然る限り、是の如き「自」を自覺せる諸々の個人は、當然その自覺内容を結合原理として一定の社會聯關を構成するに至るであらう。是の如くにして構成されたる社會聯關のみが眞に道德的に價值ある社會聯關と云はれ得るのである。吾人が曩に「十」に於て、社會聯關の構成原理として「個人」の自覺なるものを強調したのは正に之に因るものである。個人の自覺によつて、其の自覺内容を結合原理

として成立せる社會聯關に非ざれば、如何なる社會聯關と雖も遂には崩壞の運命を免れないであらう。たゞ人類の道德的使命を自覺して、道德の王國の建設に向つて精進する社會聯關のみ、始めて永恆に朽ちざる社會的結合性を有ち得る。もとより是の如き睿智的空間とも呼ばる可き純粹なる理想社會は、現實に於ては到底望む可くもない。凡ゆる理想的なるものが然る如く、此の理想社會も亦何等の現實的實在性を有しないのである。然し乍ら夫は尙現實の社會生活の嚮導理念として、其の重要な意義を認められなければならぬであらう。現實社會は凡て一定の利害關係を原理として構成される所の利益社會 (*Interessengesellschaft*) である。是の如き社會關係に於ては、個人と個人との眞に内面的道德的なる交渉の成立は、其の嚴密なる意味に於ては、到底不可能であると云はなければならぬ。固より如何なる *Gesellschaft & Ethos gemeinschaftliches* なくしては到底成立しないであらう。然し乍ら夫に於ては *Das Gemeinshaftliche* が *Das Gesellschafliche* の爲に其の影を埋沒され、従つて人間の社會的交渉に於ける人間性相互の關係は、未だ其の本來の姿に於て顯はれてゐるとは云ひ得ない。茲に於て、眞の意味に於ける人間性の解放の爲に、*Gesellschaft* を *Gemeinschaft* にまで昂揚することが人類の道德的使命となるのである。而して其の嚮導理念たる

べきものは、個人の自覺によつて構成される所の協同社會でなければならぬ。是の如き協同社會に於ては、個人は單に手段として、換言すれば單に利害關係の對象としてではなく、反つて唯恒に同時に目的自體として、獨立の人格價值を有するものとして承認されるのである。是の如き協同社會が人顯歴史の目指す可き理想社會でなければならぬであらう。「元來理性的存在者は凡て、各が自己自身並びに他の凡ゆる者を決して、單に、手段としてではなく、反つて凡ゆる時に同時に自己自身に於ける目的として、取扱ふ可きであるといふ法則の下に立つ。茲に於て然し乍ら協同的客觀法則による理性的存在者の組織的結合、即ち王國が發生する。此の王國は目的の王國(勿論たゞ理想に過ぎない)と呼ばれ得る、何者此の法則は正に目的及び手段としての此等存在者相互の關係を指すものであるから」(GII, 433)。實に此の「目的の王國」これが批判主義に於ける社會概念の冠冕を形成する所のものである。批判主義に於ける社會概念は、斯くして *Gemeinschaftsbegriff* であつて、*Gesellschaftsbegriff* ではないのである。[※]之を精神の王國と呼ぶも、或は理想の王國と呼ぶも可なりであらう。畢竟するに之れ、道德主觀の奥底に沈潜して考へられたる審知的世界に外ならないのである。人類の道德的使命を自己に於て自覺せる個人によつて構成せられる理

想社會は、斯くして一個の睿知的世界に外ならないのである。是の如き睿知的世界としての目的の王國、夫が批判主義に於ける社會概念であり、また人類歴史の窮極目標たるべきものである。

* 茲に批判主義に於ける社會概念を是の如く斷定することは、或は「十二」に於て論述せることと矛盾するかの如く思はれる。「十二」に於て論述せられたる所によれば、人類の理想社會は普遍的に法を行ふ市民社會 (Die bürgerliche Gesellschaft) であつた。従つて其處に於ては人類の理想社會は Gemeinschaft ではなくて「反つて Gesellschaft である。然し乍ら此の市民社會の概念が展開せられたる Idee zu einer allgemeinen Geschichte usw. (1784) と「目的王國の概念が展開せられたる Grundlegung (1785) との間には一年の間隔があるが故に、カントの社會概念は Gesellschaft の概念に始まり、Gemeinschaft の概念に發展し、之に盡きるものと見做して不可ないであらう。且又是の如き年代的順序を追ふ迄もなく、カントの時代に於ては、此の兩語の用法が、現代に於けるが如く嚴密でなかつたと見做しても、其の内容上より批判主義に於ける社會概念を規定する時、夫は當然 Gemeinschaftsbegriff とならなければならぬであらう。

吾人は上に於て自覺せる個人の結合によつて目的の王國の成立を説明した。然し乍ら是の如き説明は寧ろ個人意識 (Individualbewusstsein) と社會意識 (Gemeinschaftsbewusstsein) との關係を顛倒せるものと云はなければならぬであらう。人間の意識に於ける根源的なるものは、社會意識であつて個人意識ではない。個人意識は單に社會意識を個人的に限定した所に於て成立するのである。換言すれば個人の意識なるものも、畢竟するに社會に於ける個人の意識に外ならないのである。根源的なるものは社會意識であつて個人意識ではない。固より現象學的直觀の立場に立つ限り、社會意識と個人意識と果して何れが根源的なるかは容易に斷定し得ざるのみならず、寧ろ此の兩者は渾然として割つ可からざるものでもあらう。然し乍ら是の如き現象學的直觀の立場に於て把握されたる具體的意識に反省を加へたる場合、吾人は個人意識よりも寧ろ社會意識に其の根源性を置かざるを得ないのである。即ち道德的存在者としての吾人の意識の根源を形成するものは、道德の王國の一員としての Gemeinschaftsbewusstsein であり、此の Gemeinschaftsbewusstsein を根柢として始めて吾人の Individualbewusstsein は思惟可能であるのである。各の個人意識を貫く是の如き深邃なる社會意識によつて、人類歴史の嚮導理念たるべき目的の王國は成立

するのである。然らば是の如き目的の王國を構成すべき具體的原理は抑、何であるか。

十八

目的の王國を構成する具體的原理は先づ畏敬の原理 (Prinzip der Achtung) である。畏敬とは固より何等理知的なるものでもなく、又意志的なるものでもなく、單に感情的なるものに過ぎない。吾人の實踐生活に於て、理性的なるものの外は、一切實踐的認識の構成原理として許容せざる批判主義に於て、如何にして是の如き感情的なるものを、吾人の實踐生活の指導原理として定立することが出来るのであるか。夫は要するに此の畏敬感情が、何等經驗的感情ではなくて、反つて唯純粹感情なるが故である。經驗的感情は如何に夫が豊富なる感情内容を有たうとも、夫が單に經驗的なる限り、夫は到底吾人の實踐生活の指導原理とは爲り得ないであらう。何者吾人の指導原理として機能し得べき所のもの、直接所與態としての雜多性を綜合して之に統一を與へる所のものでなければならず、而も單なる經驗的感情は、雜多なる直接所與態の集積に外ならないからである。唯純粹感情のみ、吾人をして諸々の經驗的なるものゝ惑誘より脱却せしめ、道德律に従つて行爲すべく吾人を強制して止まな

いであらう。道德生活は茲に其の高調の程度に於て、宗教生活と其の軌を一にする
と云はなければならぬ。是の如き感情のみ始めて道德的、感情の名に値するので
ある。然らば此の道德的感情は何處に其の先天性の根據を有つのであるか。夫は
畢竟するに道德律に對する吾人の精神の關心性、に外ならない。吾人の精神生活に
於ける直覺の事實としての道德律の意識は、無條件的に先天的なるものであり、従つ
て又此の道德律に對する關心を喚起するものとしての畏敬の感情も、當然先天的感
情でなければならぬであらう。畏敬感情の第一の對象は斯くして道德律となる
のである。實に如何なる困窮障害の逼迫にも屈せず、専ら良心の命ずる所に従つて
行爲せんとする精進の態度は、此の純粹感情の支持の力に俟つものが多いであらう。
吾人の道德生活に於ける感情の意義も、茲に於て亦重大なりと云はなければならぬ
い。純粹意志の根本法則の構成に關しては、感情は固より何等係はる所がない。夫
は唯純粹實踐理性の立場からのみ爲さる可き事柄である。唯是の如き純粹實踐理
性の立場より構成されたる意志法則の遵奉に關して、其の動機 (Triebfeder) たるきべ
ものは、此の純粹感情でなければならぬ。意志力に於て強大なるものは、茲に於て
其の感情力に於ても強烈であると云はなければならぬであらう。純粹認識と純

粹感情と純粹意志とは、斯くして凡て同一の根源から發してゐると云ふことが出来る。夫は或は純粹精神とも呼ばるべきものであらう。従つて道德律の實踐への純粹意志の力が強大なればなる程、道德律への關心を喚起するものとしての純粹感情の力も亦強烈であると言はなければならぬ。畏敬感情の第一の對象は斯くして道德律となるのである。然し乍ら吾人の畏敬感情は、其の畏敬の第一の對象たる道德律を通じて、更に此の道德律其者を賦與する所の人格性に關心するのである。畏敬感情の第二の對象は茲に於て人格性となるのである。道德律が吾人の純粹感情としての畏敬感情を喚起する限り、其の道德律を賦與する所の人格性も亦、當然純粹感情たる吾人の畏敬感情を喚起しなければ止まないであらう。而も此の人格性とは吾人の人格の根柢としての物自體界に外ならない。一面に於て諸々の現象的なものの規定を受け乍ら、而も他面に於て之を超越し、諸々の現象的なものを統整して立つ所に、始めて人間としての吾人の尊嚴が發生するのである。自己自身に對して法則を賦與し得る所の者は、正に是の如き意味に於ての人格性でなければならぬ。自己の本質たる人格性によつて自己自身に對して法則を賦與し、而も夫が唯自己自身の賦與に係はるものたるを以ての故にのみ之に服従することに於て、人間

の尊嚴が成立するのである。他者によつて賦與されたる法則に服従する他律の立場に於ては、自覺的存在者としての人間の價値が発生しないのは論を俟たざる所である。然し乍ら又單に自己自身に對して法則を賦與するのみで、更に之を遵奉せざる時は、道德的存在者としての人間の努力の價値は発生しないのであらう。道德的存在者としての人間の價値は唯、自己が自己に對して法則を賦與し、而も夫が唯自己の賦與に係はる所のものなるを以ての故に、之に服従する所に於て成立するのである。換言すれば單なる *rezeptiv* の立場に於ては、亦もなく、また單なる *spontan* の立場に於ては、亦もなく、反つて唯 *spontan-rezeptiv* の立場に於てのみ、自覺的存在者としての人間の價値は發生するのである。是の如き自覺的存在者の組織的結合が即ち目的の王國に外ならない。従つて目的の王國の成員は、其の *rezeptiv* の側に於て見れば一個の臣下 (*Untertan*) に過ぎないのであるが、其の *spontan* の側に就て見れば一個の元首 (*Oberhaupt*) であるのである。此の臣下であると同時に元首であり、元首であると同時に臣下であるといふ二重性格が、理想の王國としての目的の王國の成員の根本的な存在の仕方である。一個の王國の臣下として、人間は尙茲に其の尊嚴を失はないであらう。現實の王國に於ては、其の成員は單に臣下としての存在様態を有する

に過ぎない。唯理想の王國に於てのみ、其の成員は臣下として法に服すると共に、元首として法を立てるのである。其の限り彼は始めて獨立的存在者としての價值を保持するのである。「元來人格が道德的法則に服、從、させられてゐる限り、彼には何等の崇高性もない、然し乍ら彼が道德的法則に關して同時に立法的であり、而して唯其の故に夫に從屬させられてゐる限り、彼には崇高性が有る。」(Gifford) 是の如き立場に於て考察されたる人格の人格性のみが、吾人の畏敬感情を喚起するのである。是の如く人格性相互に畏敬の念を拂ふ事、夫が即ち目的の王國の第一の社會道德を構成する所のものに外ならない。現實の王國に於ては、諸々の非本質的なるものが過重に評價されるであらう。然し乍ら理想の王國に於ては、唯本質的なるもののみが、眞に畏敬の對象となるのである。諸の非本質的なるものも、夫が唯其の中に本質性を宿す限りに於て、始めて人類に取つて價值あるものとなるのである。何等の本質性もなき單なる非本質的なるものは、如何に其の分量に於て大であらうとも、畢竟は過ぎ行く空しきものに外ならないのである。唯人間に於ける本質的なるもののみ、更には又此の本質的なるものによつて開顯されたる非本質的なるもののみ、始めて永遠に朽ちざる持續性を有するであらう。是の如き人間に於ける永遠的なるも

のに向つて、吾人は畏敬の念を捧げるのである。固より本質的なるものに固執しての生活は、非本質的なるものに自己を渡せる生活に比較して、遙かに荆棘に満ちた道を歩まなければならぬであらう。然し乍ら何れの道が眞に祝福されたる道であるか、夫は唯吾人が此の世の生を了へる時に自ら判別する所であらう。實に價值生活なくして吾人には何等の生活も有り得ないのである。此の價值生活の根柢たるべき人格性に對して、吾人は畏敬の念を捧げるのである。蓋し人類社會の道德觀念が根柢より動搖し、社會の成員の相互批判が極度に深刻尖鋭となつた現代の如き時代に於ては、是の如き人格相互の畏敬感情に就て語るが如きは、迂を極むるもの一つでもあらう。社會の成員の相互批判が尖鋭となればなる程、彼等は相互に畏敬感情よりも寧ろ輕蔑感情を抱くに至ると云はなければならぬ。眞に人格的なるものを畏敬せんが爲に、反つて非人格的なるものを輕蔑するは、固より意義なくはないであらう。否寧ろ眞に非人格的なるものを輕蔑することを知るもののみ始めて眞に人格的なるものを畏敬することを知ると云ふことが出来る。此の點に立脚する時、吾人は *Ethik der Achtung* に對して *Ethik der Verachtung* なるものを思惟することが出来る。然し乍ら夫は恒に畏敬感情が其の背後に用意されたる所の輕蔑感情でなけ

ればならないのである。換言すれば、輕蔑の對象たる非人格的なるものが拂拭せられると共に、人格的なるものに對する畏敬の感情が、更により強き程度を以つて、其の背後より湧き來る底の輕蔑感情でなければならぬのである。茲に於ては従つて輕蔑感情が強烈であればある程、夫に對する反動としての畏敬感情も愈々深刻なるであらう。是の如き輕蔑感情のみが倫理の立場に於て承認されると共に、また眞正の意味に於ける畏敬感情は恒に其の反面に於て是の如き輕蔑感情を豫想してゐると云はなければならぬ。卑劣なるものに對して輕蔑の感情を抱くことなくして、如何にして高貴なるものに對して畏敬の感情を抱くことが出來るであらうか。高貴なるものに對する畏敬感情は、其の反面に於て當然卑劣なるものに對する輕蔑感情を豫想してゐると云はなければならぬ。是の如き輕蔑感情のみ、始めて倫理の立場より其の意義を承認される所のものである。然らざる限り、如何なるものも夫が單に主觀的根據に立脚する輕蔑の爲の輕蔑感情なる限り、夫は固より非倫理的なるものとして道德の立場より當然却けらるべきものである。人類の社會生活に於ける根本道德の一は、斯くして依然として人格相互に於ける畏敬の道德でなければならぬ。此の畏敬の道德が目的の王國を構成する第一の具體的道德である。

十九

理想の王國としての目的の王國を構成する具體的原理は次に親愛の原理 (Prinzip der Liebe) である。蓋し吾人が前節に於て論述せる畏敬感情は、人類の社會生活に於て社會の成員相互間に於ける一定の間隔を保たんがための反撥の原理 (Prinzip der Abstossung) として機能する所のものである。社會の成員は其の團體生活に於て、相互に狎れ合ふ事によつてではなく、反つて唯他人格の衷に於ける人格性を人格性として畏敬することによつて、眞に自己自身も自由であり、また其の團體生活を圓滿に進行せしめ得るであらう。吾人は屢々長上を自己と同等に呼びなすことによつて、宛も其の長上と同等の位格に立つたかの如く意識する。然し乍ら之は自己の位格を擧げざるのみか、寧ろ反つて夫を貶す所以となるであらう。長上を長上として尊敬せざることは、即ち長上の人格に於ける人格性を畏敬せざることであり、夫はやがて自己の人格に於ける人格性を畏敬せざることであり、従つてまた自己の人格の品位を無視することとなるであらう。何者人格性とは自他を超越して夫等の根柢に在り、夫等をして存在せしめる場所となるものなるが故に、他人格に於ける人格性の價值を否定することは、同時に自人格に於ける人格性の價值を否定することとなるか

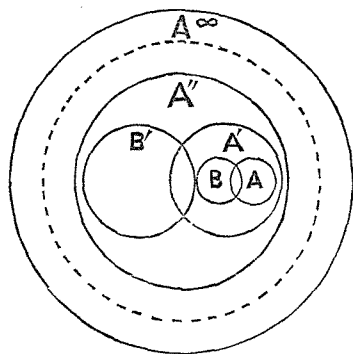
らである。自人格に於ける人格性の價値を承認せんとすれば、他人格に於ける人格性の價値をも承認せざるを得ず、他人格に於ける人格性の價値を承認せざらんとすれば、自人格に於ける人格性の價値をも承認することを得ないのである。斯くして吾人は唯他を敬ふことに於てのみ、始めて自を敬ふことが出来るのである。自敬は唯恒に敬他を俟つて始めて可能であるであらう。是の如き立場に於てのみ、吾人は眞に自由であり、また統制ある社會生活を營むことが出来るのである。然し乍ら眞に畏敬の原理のみにては、社會の成員は相互に反撥し合ふのみであつて、彼等の間に何等の親密性をも見出し得ないであらう。茲に於て社會生活に於ける牽引の原理(Prinzip der Anziehung)として親愛の原理が要求されるのである。人類の協同生活(Gemeinschaftsleben)の本質は、相互畏敬よりも寧ろ相互親愛に於て存立するとも云はれるであらう。然らば批判主義の立場に於て説かれる親愛感情とは抑、如何なるものであるか。

批判主義に於ける實踐の概念が純粹實踐理性を根柢として立つ限り、批判主義に於ける愛の理論は固より何等感覺的、愛(Die sinnliche Lieb)を主張するものではない。夫が男女間の性愛であらうとも、または親子間の慈愛であらうとも、夫等が單に感覺

的なる限り、夫等は凡て非理性的なるものとして、批判主義の立場より、一應實踐の原理としての其の價値を否認されるのである。吾人は茲に於ても亦批判主義實踐哲學の出世間性を認めざるを得ないのである。吾人は何故に是の如き感覺的愛を實踐の原理として却けざるを得ないのであるか。夫は要するに凡ゆる直接所與態が然る如く、感覺的愛も亦一個の直接所與態として夫等の間に矛盾撞着を惹起し、惹いては感覺的愛其者の目的自身をも破滅せしめるに至るからである。理性的なるものによつて統制せられざる感性的なるものは、夫等自身の間を生起し來る葛藤の故に、遂に夫等自身の感覺的享受の目的をも達せしめざるに至るであらう。感性的なるものを享受せんとすれば、吾人は必然的に超感性的なるものによつて之を統制し、永恆の見地の下に於て之を享受せざるを得ないであらう。茲に於て吾人は批判主義の立場より、感覺的愛の概念に對して實、踐、的、愛 (Die praktische Liebe) の概念を定立せざるを得ないのである。茲に吾人が實踐的 (praktisch) と呼ぶ所のものは、固より單に實際的 (pragmatisch) といふが如き意味に於てのものではなく、反つて唯吾人が曩に「七」に於て述べたるが如き純粹なる意味に於てのものでなければならぬのである。換言すれば實踐的愛とは純粹理性の光の下に於て見られたる所の愛でなければ

ばならないのである。斯かる愛のみが眞に哲學的愛 (Die philosophische Liebe) として、永恆に滅びざる實在性を獲得しうるであらう。感覺的愛は時としては強烈に、時としては有効に作くでもあらう。然し乍ら夫は斷續恒無きものであり、遂には吾人をして愛することの目的夫自身の遂行を不可能ならしめる。純粹理性の光の下に於ける愛は、始中終時を通じて、其の強度に於て些かの變化もなき冷靜なる愛でなければならぬ。愛への無限の衝動を純粹理性の立場に於て形相化 (Formulieren) して、此の形相化されたる無限の愛情を内容として立つ所の、冷靜なる愛でなければならぬ。従つて夫は一見冷酷として解釋さるべき可能性を有する所のものである。然し乍ら單に冷酷なる態度と、其の中に無限の愛の炎を燃す所の冷靜なる態度とは、根本的に、本質的に異らなければならない。是の如き愛のみが純粹理性の光の下に於て見られたる愛である。吾人が今 A なる對象——夫は人でもあれ或は物でもあれ——を愛し、之に執着し、之を獲得するとせよ。然る時吾人は夫と共に A ならざる所の、B なる對象に對する愛を斷念し、之を放棄しなければならぬ。然し乍ら是の如き分裂せる愛の實踐は、到底吾人の堪へ得る所ではない。茲に於て吾人は單なる特殊者としての A を一應捨離して、更に A 及び B を包攝して其の存在根據となる普遍

者A'にまで滲透し之を愛するのである。然し乍ら此の普遍者A'も亦畢竟一個の相對的普遍者たるに過ぎず、其の限り尙吾人をして同等の相對的普遍者B'との關係に於て、愛の分裂を感せしめねば止まないであらう。茲に於て吾人は更に此等の相對的普遍者A'とB'とを包攝して其の存在根據となる普遍者A''にまで滲透し之を愛するのである。是の如く特殊者の普遍化の過程を無限に推進して最普遍者A[∞]にまで到達した時、始めて吾人は茲に安息し、之に愛着して、之に於て凡ゆる特殊者を愛するのである。今此の推理過程を圖示すれば略下の如くなるであらう。



或は是の如く最普遍者の立場に於て凡ゆる特殊者を愛することは、最も情の薄き愛であるとも見られ得るであらう。然し乍ら事實は然らざるのみか、寧ろ反つて是の如き愛のみが眞に深き愛であると云はなければならぬのである。單なる特殊者を特殊者として愛するよりも、此の特殊者を普遍的見地の下に於て活かさんが爲に、一應夫の特殊性を否定する者の方が、より深く此の特殊者を愛するものであると

云はなければならぬ。己が子の特殊性より普遍性への成長を希はんがため、其の單なる特殊性を否定する親が、己が子の單なる特殊性を特殊性として放置する親よりも、愛情深きものであることは、誰しも否定し得ない所であらう。斯くして愛は吾人に於ては甚だ峻嚴なる否定の側面を伴ふのである。無限の否定をなすもののみ、始めて無限の肯定をなすことが出来る。愛の深さは茲に於て否定の深さに比例するでもあらう。而して否定作用は畢竟否定を通じての統一作用に外ならないのである。此の統一力の強大なるもの程、其の愛情も亦強烈であると云はなければならぬ。統一力の強大なるものは畢竟するに自己否定の力の強大なるものに外ならないのである。絶對に自己を否定せるもののみ始めて絶對の愛に生きることが出来る。衆生の苦惱を己が苦惱とし、衆生の憂悶を己が憂悶とする所の佛陀こそ、世界に於ける最も愛の深き者であると云はなければならぬ。固より批判主義が依然として一個の道德的立場に止まつて、宗教的立場に進まざる以上、是の如き絶對愛の理論は其の説く所ではないであらう。然し乍ら宗教的立場は道德的立場を其の契機として含むものであり、また道德的立場は宗教的立場にまで擧揚せらるべき豫備段階として見られるともすれば、此の兩者の間に何等の接觸點を見出し得なくは

ないであらう。夫は要するに夫等の立場が客觀的立場に立脚するといふことである。單なる主觀性を脱却して客觀性に透徹する所に、眞の愛は成立するのである。吾人が批判主義の立場に於て、實踐的愛と呼ぶ所のものは正に是の如き客觀的立場に立脚せる愛に外ならない。之のみが眞に道德的愛(Die sittliche Liebe)の名に値するであらう。是の如き純粹理性の立場に於て見られたる親愛感情(Liebesgefühl)は、畏敬感情(Achtungsgefühl)と共に純粹感情或は道德的感情と呼ばれ得る所のものである。夫は先驗主義としての批判主義の立場よりも當然其の意義を承認せらるべき所の感情でなければならぬ。

吾人は前節に於て Ethik der Achtung に對して Ethik der Verachtung なるものの存立意義を承認した。今や茲に於ても吾人は Ethik der Liebe に對して Ethik des Hasses の存立意義を承認せんとするのである。單に憎惡の爲の憎惡感情は固より非倫理的なるものとして、道德の立場より其の存立を否定されなければならない。然し乍ら其の背後に親愛感情が恒に用意されたる所の憎惡感情、換言すれば眞に眞なるものを愛せんが爲に、非眞なるものを憎むことは、倫理の立場より一應其の意義が承認されなければならないであらう。非眞なるものを憎むことなくして如何にして眞な

るものを愛することが出来るであらうか。眞なるものに對する親愛感情は、其の反面に於て當然非眞なるものに對する憎惡感情を豫想してゐると云はなければならぬ。是の如く客觀的根據に立脚する所の憎惡感情は一應倫理の立場より其の存立意義を承認されるでもあらう。然らずして單に主觀的根據に立脚せる憎惡の爲の憎惡感情は固より非倫理的なるものとして、人類の社會生活に於て否定されなければならぬであらう。人倫の世界たる目的の王國は、唯客觀的立場に立脚する個人によつて成立するのである。人類の社會生活に於ける根本道德の一は、斯くして依然として人格相互に於ける親愛の道德でなければならぬ。此の親愛の道德が目的の王國を構成する第二の具體的道德である。

二十

吾人は批判主義に於ける主要なる社會概念として、目的の王國なる概念を展開し來つた。然し乍ら夫は固より單に一個の理想概念であつて、何等現實概念ではない。人類の理想社會が如何に目的の王國としての *Gemeinschaft* であらうとも、而も其の現實社會は依然として一個の *Gesellschaft* たる存在を止めないのである。然る限り、目的の王國て、如き社會組織も畢竟一個の夢想に過ぎないであらう。夫は凡ゆる

理想的なるものの負ふ可き當然の運命でなければならぬ。然し乍ら吾人は現實の社會生活に於て、尙此の目的の王國なる概念を現實的に彷彿せしめることが出来るであらう。現實の社會生活として數へらる可き國家生活、市民生活及び家族生活等の中、最も *Veranmischung* としての目的の王國に近きものは家族生活殊に夫婦生活であると云はなければならぬ。夫婦の兩者は、其の結婚生活に於て、相互に相互を手段として使用し乍ら、而も恒に同時に目的自體として使用する。相互に手段として使用されることが同時に其の各々の自己目的性を發揮する所以であり、自己の存在の目的を發揮せんとすれば、相互に手段として使用されざるを得ない所の、此の緊密なる相互關係に於て、目的の王國は其の面影を宿してゐると云はなければならぬ。惟ふに人類の社會關係の中、其の最も基本的なるもの、夫婦關係に過ぐるは無いであらう。男女兩性の間に於ける性愛への衝動には、其の衝動の満足を通じて、永遠的なるものに繋がらんとする神的なるものが、宿つてゐると云はなければならぬ。結婚は生物的なるものの満足を通じて、道德的なるものを實現せんとするものとして、其の意義を有するであらう。茲に結婚の倫理が成立する。是の如き結婚生活を營む夫婦關係に於て、吾人は目的の王國の理念の顯現を見るのである。獨り家族生

活に止まらず、市民生活、國家生活も亦其の社會生活の根柢に於て、Etwas (Freiwilligkeit) を豫想して始めて *Gesellschaftsleben* としての其の存立を保ち得るであらう。凡ゆる理想的なるものが然る如く、理想の王國としての目的の王國も亦現實の社會生活の嚮導理念として其の意義を有すると共に、更に又現實の社會生活に於て恒に極微的にではあると云へ、其の理念を實現しつゝあると云はなければならぬ。目的の王國は茲に於て人類の社會生活にとつて依然として其の意義を有するのである。

然し乍ら是の如き目的の王國は、單に夫のみにては一個の精神の王國たるに過ぎず、従つて夫は自然の王國即ち物質の王國と結合することなくしては、何等歴史性を有し得ないであらう。茲に於て目的の王國は、其の具體的地盤を獲得せんがために自然の王國と結合しなければならぬのである。目的の王國と自然の王國との結合點は何處に在るのであるか。夫は即ち目的の王國の成員としての人格が、一個の道德主觀として、目的論的體系としての自然全體の終局目的たるの地位に立つ點に在るのである。道德的合目的性の原理によつて貫通されたる自然の合目的體系に意味を與へるものとして、道德主觀としての人間は、一方目的の王國に屬すると共に、他方自然の王國にも屬するのである。自由と自然とは茲に於て始めて密接に結

合されたとも云はれ得るであらう。本來の意味に於ての道德の王國とも云はる可きものは、正に是の如き自由の王國と自然の王國との完全に綜合統一されたる世界でなければならぬのである。或は之を歴史の王國と呼ぶも可なりであらう。是の如き歴史の王國を一方に抽象する時其處に理想的なる精神の王國が考へられ、また之を他方に抽象する時其處に現實的なる物質の王國が考へられるのである。此の物質王國を地盤としての精神王國の實現の過程、夫が即ち人類の歴史社會生活に外ならないのである。斯くして批判主義に於ける歴史社會の概念は、畢竟するに此の自然に於ける人類の自由實現の過程に終始するのである。

* * * * *

上來吾人は批判主義に於ける自由の概念を、先驗的自由、實踐的自由及び歴史的自由の三概念に分類して検討し來つた。而して此等三個の自由概念を貫いて其の根柢に流れてゐる所の思想は、畢竟するに現實的なるものと理想的なるものとの峻別、更には理想的なるものへの現實的なるものの無限の近迫であつた。もとこれ「純粹理性批判」によつて基礎附けられたる批判主義の根本精神より來る當然の歸結でなければならぬ。吾人は固より、自然の世界のみを以つては盡す可からざる道德の

世界を確立するものとして、批判主義に於ける現實的なるものと理想的なるものとの峻別に重要な意義を認めざるを得ないのである。然し乍ら現實的なるものと理想的なるものが、果して是の如く峻別せらるべきであるか否かは固より疑問に屬する所であり、一應に於て之を峻別するとするとしても、再應に於ては寧ろ現實的なるものの中に理想的なるものの顯現を認識し現實的なるものと理想的なるものとの一致を強調する立場に到る可きであらう。或る意味に於てはまた現實的なるものを外にして、何處にも理想的なるものは存在しないとも云はれ得るであらう。現實的なるものと理想的なるものとの完全なる一致を強調することは、理想的なるものの理想性を埋没し、また之を軟弱にする所以ではなくて、反つて寧ろ其の眞の理想化の力を顯揚し、また之を強硬にする所以でなければならぬ。現實的なるものを超越することによつてではなく、反つて唯之に内在することによつて、眞に理想的なるものの價值は發生し來るのである。然し乍ら夫は固より何等理想的なるものの理想性の没却を意味するのではない。理想的なるものが如何に現實的なるものとの一致に於て見らる可きではあらうとも、而も理想的なるものの理想性は依然として保持されなければならぬのである。此の現實的なるものに對する理想的な

るものの理想性を發見し、之を強調した所に批判主義の不朽の意義は存する。而も夫は永久に過程的意義に止まるものであつて、何等吾人に對して終結的理論を與へるものではない。合理主義が經驗的なるものを徹底的に合理化することによつて、道德の世界——夫は合理的なるものの經驗的なるものに對する鬭争に於て成立する——を打倒せんことを恐れ、經驗的なるものと合理的なるものとの峻別を強調した批判主義は、眞に其の合理的なるものの具體的活動の地盤を見出さんが爲に、再び合理的なるものと經驗的なるものとの一致を主張する立場にまで移行行かなければならないのである。

(昭和七年四月十日脱稿)——完——

「批判主義に於ける自由の問題」正誤表

誤	正
▲第十六卷・四月號	
九四頁終六行 社會心然性	社會必然性
▲第十六卷・六月號	
八一頁始六行 In Wedel-Oder	Inthvedel-Oder
一〇四頁始二行 後者が前者よりも	前者が後者よりも
誤	正
一〇六頁始四・八・九行 運載者	運載者
一〇七頁始四行 生理的	物理的
始五行 運載者	運載者
終三行 身体の	身體の
一 九頁始一・二行 合一態	合致態
▲第十七卷・七月號	
八二頁註 Spiritualismus	Spiritualismus